

大鳥井山遺跡の平安時代の建物跡（再考）

島田祐悦（横手市教育委員会）

1. はじめに

横手市の後三年合戦関連遺跡には、大鳥井山遺跡の他に金沢柵と沼柵がある。大鳥井山遺跡は3年の内容確認調査を得て、国指定史跡となったのが平成22年であり、今年で12年の歳月を経ている。

その後、金沢柵特定のための調査として陣館遺跡を5年、尾根に広がる金沢城跡の調査を5年、そして、現在金沢城跡西麓部の調査を継続し2年が経過している。陣館遺跡では、四面庇掘立柱建物跡の検出等から清原氏に関わる遺跡として平成29年に国指定史跡に追加となり、金沢柵の持仏堂ではないかと想定している。尾根に広がる金沢城跡は調査の結果、秋田県で唯一内容が確認された中世後期の南部氏と小野寺氏に関わる大規模な城郭として、良好に保存されている（島田 2017）。金沢城跡西麓部では、古代の柵跡の一部が検出され、館を特定するため調査を継続中であるが、次年度の調査により方向性を定める必要がある。

沼柵は、候補地として沼館城跡や千刈田遺跡を考えられてきたが、沼館城跡はこれまでの縄張・文献調査から、中世後期の小野寺氏の盟主であった種道とその子輝道の城郭である可能性が高くなってきている（白根 2010, 島田 2017）。千刈田遺跡では、永延三年（989）紀年銘の八稜鏡が出土し、明治初期の地籍図などにより館跡の存在が想定されるが、ほ場整備や宅地化などにより消滅している可能性が高い。沼柵を特定するためには、沼館城跡の本丸を調査し、中世後期の遺構・遺物の他、古代後期のものが存在するか確認する必要がある。沼柵候補地には沼館城跡近接地である造山の地も指摘されている。現在、雄勝城・駅家研究会や秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所が内容確認調査を実施しており、東大路と考えられる道路側溝跡（谷地 2021）や「駅長」と書かれた墨書土器など（高橋 2021）、古代城柵に関連する遺構・遺物が蓄積されている。

大鳥井山遺跡に話を戻そう。遺跡の国指定史跡後は、横手市教育委員会が平成25年度に『大鳥井山遺跡保存管理計画』を策定し、その後、史跡内は関係部局と調整しながら、アスレチック広場の遊具の撤去、テニスコートの一部の利用停止、プールの撤去、雑木の一部撤去などが進んできている。今年度、文化庁より認定された『横手市歴史文化遺産保存活用地域計画』では、令和7年度より大鳥井山遺跡の整備基本計画の策定も記述されている。これらのことから大鳥井山遺跡の景観や遺構・遺物について、これまでの調査研究などにより再検討する必要性が生じてきているのである。今回は、大鳥井山遺跡の建物跡について再考した途中経過であり、公式なものではないが、今後の叩き台として報告をすることをご容赦願いたい。

2. 大鳥井山遺跡小吉山東部地区の建物跡再考【図1～5】

小吉山東部地区は、遺跡を象徴する二重の土塁と堀が検出された場所であり、現在の多目的広場（グラウンド）に位置する。平成21年に刊行した『大鳥井山遺跡-第9・10・11次-報告書』において、図1,2のように建物跡を報告しているが（横手市教委 2009）、この段階では第1・2次調査の『大鳥井山 I・II』の概報を引用しただけであった（横手市教委 1978, 1979）。そのため、今回は建物跡の主軸方向を基準に掘立柱建物跡を復元分類し、54棟を抽出することができた（図3～5・『横手市の重要遺跡

と史跡整備』リーフレット P11)。建物跡の主軸は、赤色・桃色・紫色・黄色・茶色・橙色・黄緑色・青色・緑色の 9 方向に分類することができ、遺構の規模やつながりから、4 群に分けられた。

1 群は、約 18° 東偏する赤色（竪穴 1・掘立 2）、約 23° 東偏する桃色（掘立 2）とした。遺構は北側に位置し、建物が直線的に連なっている。土塁と堀や、他の建物群と大きく軸方向が異なっている。南端に位置する溝跡群も同軸であり、今後分析する必要がある。

2 群は、約 18° 西偏する紫色（竪穴 1・総柱 1・櫓状 2・掘立 2）、約 23° 西偏する黄色（総柱 1・櫓状 1・掘立 5）、約 29° 西偏する茶色（総柱 1・掘立 4）とした。これも東部地区の北側だけにあり、南側まで展開していない。1 群とは異なり、現地形に合わせた主軸方向とみることができる。この段階で、櫓状建物や倉庫と見られる総柱建物が確認される。北東隅の櫓状建物は紫から黄色の変遷がある。中央にも紫色の 1SB21 櫓状建物がある。中央東縁に 1SM11 道路上遺構に門とみられる黄色 1SB57 掘立柱建物があるが、その北側は柵と並行しているものの、南側は堀によって切られているので、古い地形が南側にあったことを想定させる。この 1SM11 道路の西側には、場を区画する 2SD12 溝跡があり、これより北側で 2 群が展開している。1SB21 櫓状建物は、この事と関係があるのかもしれない。

3 群は、約 3~8° 東偏する橙色（竪穴 1・掘立 3）と約 6~9° 西偏する黄緑色（竪穴 2・櫓状 2・掘立 5）とした。建物は全体的に歪んでいるものも多いが、橙色と黄緑色の軸線が共通するもの（2SI04・1SB02）もあり、同時期に存在していた可能性も考えられる。建物が全体的に広がりを見せる段階である。橙色の主軸方向は、小吉山西部地区の火葬墓や大鳥井山西部地区の四面庇建物跡も同軸である。平坦部東縁には、黄緑色である櫓状建物 2 棟があり、北側中央の掘立柱建物は、桁行 2 間に梁行 1 間の歪んだものが多く展開している。これは兵舎のようなものであろうか。

4 群は、約 15° 西偏する青色（総柱 1・櫓状 1・掘立 10）と約 10° 西偏する緑色（総柱 3・掘立 4）とした。1 か所のみ建物の重複があるものの、その他は単独立地であるから建物を徐々に増加させたと考えられる。3 群の建物位置は踏襲するも、全体的に規模の大きい建物に建替えられている。中央にある大型の総柱建物跡の柱掘り方には、根石とみられる石が確認されていることから、倉庫の可能性が高い。中央東側に位置する青色 1SB22 櫓状建物は、櫓門と想定され、二重の土塁と堀と出入口がつながっている。また、平坦面は、溝や柱列などで場を 3 つに区割りをするなど、遺跡の終末の様相を表しているものと思われる。

3. 大鳥井山遺跡小吉山北部地区の建物跡再考【図 6~11】

小吉山北部地区は前報告のとおり、縄文時代の遺構が多く確認された場所で、現在のテニスコート付近である。平安時代のロクロ土師器（かわらけ）が、部分的な調査にも関わらず大量に出土した場所で、遺物の 9 割が北部地区の出土である。この事から宴会儀礼などが行われた遺跡の中心域と思われる。第 5 次調査概報『大鳥井山 V』では、櫓状建物と柵が報告されたが（横手市教委 1981）、第 6・7 次調査は未刊であった。しかし、遺構実測図は残されており、『大鳥井山遺跡-第 9・10・11 次-報告書』で収録したが、細かい分析をするまでには至らず、分かりやすい柱穴を抽出して建物を復元しただけであった（図 6~8）。今回は、小吉山東部地区の建物跡の主軸方向を北部地区まで延長し、同軸の分類を行ったところ、38 棟を抽出することができた（図 9~11・『横手市の重要遺跡と史跡整備』リーフレット P9, 10）。記録漏れしている柱穴があることが写真より確認できる場合もあり、建物の柱筋を検討して復元を試みている。小吉山東部地区と同じように建物の主軸方向は大きく 4 群に分かれ、赤色・桃色・紫色・黄色・茶色・橙色・黄緑色・青色・緑色の 9 軸方向を確認した。建物の立地は、中央北側に規模の大きい中心建物、東側に付属建物、西側は空閑地としての建物配置が想定された。

1群は、約18°東偏する赤色（掘立5）、約35°東偏する桃色（掘立2）とした。北側で東西に広くしている。北西側の建物は、桁行2～3間に梁行1間を想定した。中央西側の建物では10世紀後半の土器が出土したSK170土坑等が東側近くにあり関連性があるのかもしれない。小吉山東部地区と同じように、地形と軸方向が異なっており、古い段階の遺構と思われる。

2群は、約18°西偏する紫色（竪穴1・掘立7）、約23°西偏する黄色（掘立1）、約29°西偏する茶色（掘立7）とした。小吉山東部地区と同じ軸線である。黄色建物は東側で確認した1棟で付属建物である。紫色の建物は中央北側にまとまっている。最も北に位置するのが、中心建物で桁行3間に梁行2間で、南側に庇が付く建物を中心に東西に建物がある。また中心建物の南側柱筋上には建物が並立しており、竪穴建物も確認される。東側には1棟の建物が、西側には同軸の区画溝がある。茶色の建物は中央北側に5棟、東側に2棟あるが、遺構の重複から小期の建替えが考えられる。中央北側には東西方向に建物が並立しており、南側には展開しない。柱掘り方の大きい2棟の建物は、中心建物とみられ、桁行3間に梁行2間で、南側に庇が付く建物であるが、紫色中心建物より規模が大きくなっている。西側に同軸の区画溝がある。中心建物の大型化を考慮すれば紫色⇒茶色で、小吉山東部の新旧関係から、遺構の変遷は、紫色⇒黄色⇒茶色と想定される。

3群は、約1°～7°の東偏する橙色（竪穴1と掘立3）と約6°西偏する黄緑色（掘立4）とした。どちらも中央北側に中心建物、東側に付属建物があるが、中心建物は橙色が北端にあるのに対し、黄緑色は南側に移動している。これは黄緑の段階で内堀を構築するため、移動せざるを得なかったのだろうか。北側の土塁と堀の位置に橙色竪穴建物が1棟確認されており、当初はこの部分まで平坦地や緩斜面が広がっていたことを想定させる。これらを考慮すれば遺構変遷は橙色⇒黄緑となる。外堀に関しては、10世紀後半から11世紀後葉の土器が出土しているのに対し、内堀は11世紀中葉以降であるからこれを補強する。橙色中心建物は、これまでの南庇建物から四面庇建物へ建替えをしたとみられる。前述のとおり大鳥井山西部地区の四面庇建物と同軸であり、この位置からは、大鳥井山の四面庇建物と小吉山西部にある積石塚が一直線上に連なっている。このように考えれば、小吉山北部の中心建物は南向きであり、大鳥井山西部の四面庇建物は北向きと考えられる。黄緑色の中心建物は梁行3間に桁行2間の庇がない側柱建物であるが、梁間が均等ではなく、建物としては不安が残る。

4群は、約13°西偏する青色（掘立5）と約10°西偏する緑色（櫓状1・掘立3）とした。建物の重複は1か所でみられるが、その他は単独で立地することから建物を徐々に増加させたと考えられる。中心建物は青色のみなので、遺構変遷は青⇒緑と考えられる。3群の建物位置は踏襲するも、大規模な青色中心建物が建てられている。『大鳥井山遺跡-第9・10・11次-報告書』では、7SB01と7SB03と2棟として捉えていた建物であるが、両建物が同軸線上にあり、見落としていた柱穴も確認された。この場所は、道路による未調査部分で、6次と7次の調査区境界、写真で確認される柱掘り方などの状況を鑑み、考慮に入れた結果、大型の建物となったのである。緑色中心建物は確認されないため、青色中心建物が緑色の時期にも建っていたと思われる。また青色大型建物の南側端には緑色1SB22櫓状建物がある。これは櫓門と想定され、二重の土塁と堀と密接的な関係がある。東側には付属建物と区画溝が確認されている。複数期の区画溝が重複しているが、最終的には櫓状建物の外側に柵があったと推察される。これまで2群から3群までは、建物が確認できなかった南西側でも建物があり、その立地場所からも櫓状建物と柵は並立関係にあると思われる。緑色の櫓状建物と柵は、小吉山北部地区の防御機能を高めるものであり、青色中心建物を防御することが目的と考えれば、青色⇒緑色の遺構変遷が考えられる。

4. 大鳥井山遺跡小吉山南部地区の建物跡再考【図 12, 13】

小吉山南部地区は現在の二重の堀と土塁の南端部あたり、アスレチック広場跡地に位置する。『大鳥井山遺跡-第9・10・11次-報告書』では、図12のように遺構配置図を表したが、建物跡はほとんど復元することはできなかった。第3・4次調査の『大鳥井山Ⅲ・Ⅳ』も同様の状況であり（横手市教委1980, 1981）、これは盛土に構築されていた遺構を取り除いたために、遺構平面形が不明瞭になったことが想定される。小吉山東部地区での建物跡の主軸方向を基準に掘立柱建物跡を復元したところ、19棟を抽出した（図12, 13）。建物の主軸方向は2群のみの確認で、赤色・桃色・紫色・黄色・茶色の5方向の建物主軸が確認された。盛土上面の遺構については、深い掘り込みであるならば確認できるが、浅ければ消滅しているのであろう。溝跡が多く確認されているが、今回は分析の対象としない。

1群は、約18°東偏する赤色（掘立4）、約20~30°と東偏する桃色（掘立2）とした。ここでの赤色と桃色の新旧については不明であるが、小吉山全体を見ると赤色が18°東偏で落ち着いているのに対し、桃色は20~35°と主軸方向にばらつきがある。赤色が計画的に最初に建てられ、建替えの時期になって周辺に桃色が構築されたのであろうか。小吉山南部地区の状況は溝跡に伴う小規模な建物が最初で、その後に桃色のやや規模の大きい倉庫を伴う建物群が建てられたとも思われる。

2群は、約18°西偏する紫色（掘立2）、約23°西偏する黄色（掘立2）、約36~45°西偏する茶色（門2・櫓状1・掘立3）とした。紫色と黄色は、小吉山東部・北部地区と同じ軸線であるが、茶色は異なっている。これは土塁と堀及び柵を構築するため、地形に合わせた結果と思われる。この事からも、紫色⇒黄色⇒茶色の変遷が考えられる。中央に位置する紫色建物の東側及び北側に位置する黄色建物の南東には、出入口とみられる柵が途切れた部分と複数期の柵があり、2群段階から柵が巡っていた可能性は高いと思われる。茶色段階になると南東側で柵に跨る櫓状建物とその東に門跡が構築されたと想定する。この南側には二重の堀と土塁が構築されており、盛土が取り除かれたとしても、この地区では2群という早い段階で、造成工事が終了していた可能性もある。

5. 大鳥井山遺跡の中心建物【図14】

庇を持つ大型の中心建物は、小吉山北部地区と大鳥井山西部地区の2か所で確認され、前者が6棟、後者が1棟である。後者は9SB01で、四面に庇が巡る東西棟建物である。規模・平面形は、桁行7間（ $1.95 \times 7 = 13.65\text{m}$ （45.5尺））に梁行4間（ $1.95 + 2.55 \times 2 + 1.95 = 9\text{m}$ （30尺））で、面積は 122.85m^2 を測る。柱筋が通り、柱間も均等な建物で、均整のとれた建物といえ、比較的長期間、存続していた建物ではないかと指摘されている（八重樫2019）。この建物は遺跡内で最も高い大鳥井山頂部の狭い空間にその存在を誇示するかのようになっている。ここからはロクロ土師器（かわらけ）は全く出土せず、生活感の感じられない場所である。下から大鳥井山を見上げれば、四面庇建物が象徴的にあり、信仰の対象となってもおかしくない。この建物については、清原氏の持仏堂の可能性が指摘されている（島田2016, 窪田2016, 杉本2021）。

小吉山北部地区の6棟の中心建物は、建物の新旧関係より紫色（仮SB37）⇒茶色（仮SB34・仮SB38）⇒橙色（仮SB43）⇒黄緑色（仮SB33）⇒青色（仮SB32）の5段階の中心建物変遷が想定された。

建物規模は次の通りである。紫色（仮SB37）は桁行3間（ $2.4 \times 3 = 7.2\text{m}$ （24尺））に梁行3間（ $2.7 \times 2 + 1.35 = 6.7\text{m}$ （22.5尺））で、面積は 48.24m^2 。茶色（仮SB34）は桁行3間（ $3.6 \times 3 = 10.8\text{m}$ （36尺））に梁行3間（ $3.0 \times 2 + 1.5 = 7.5\text{m}$ （25尺））で、面積は 81m^2 。茶色（仮SB38）は桁行3間（ $2.7 + 3.0 + 2.7 = 8.4\text{m}$ （28尺））に梁行3間（ $2.4 \times 2 + 2.1 = 6.9\text{m}$ （23尺））で、面積は 57.96m^2 。これら建物は南庇建物で、紫色（仮SB37）と茶色（仮SB34）は庇の出は梁間の半分、茶色（仮SB38）は

梁間より 30 cm狭いだけで広い。桁行は前二者が等間隔であるのに対し、中央部分が広がっている。

橙色（仮 SB43）は身舎の支柱穴は確認できるものの、庇の柱穴は等間隔ではなく不明瞭である。身舎と庇の出で検討すると、桁行 4 間（西より $2.55+2.25+2.85+2.55=10.2\text{m}$ （34 尺））に梁行 3 間（北より $2.55+2.4\times 2+2.55=9.9\text{m}$ （33 尺））で、面積は 100.98 m^2 。庇の出は身舎柱間より広く、同じ橙色の 9SB01 の梁行と同じである。身舎は梁行 2 間×桁行 2 間だとするならば特殊な建物といえる。黄緑色（仮 SB33）は、桁行 3 間（西より $3.6+3.3\times 2=10.2\text{m}$ （34 尺））に梁行 2 間（北より $3.0+1.8=4.8\text{m}$ （16 尺））で、面積は 48.96 m^2 の東西棟側柱建物である。桁行総長は橙色（仮 SB43）と同じであるが、桁行と梁行とも等間隔ではない。

青色（仮 SB32）は、身舎の四面に庇が巡り、さらに北側に孫庇が付く南北棟建物と想定される。桁行 6 間（北より $2.1\times 2+3.3+3.6+3.3+2.1=16.5\text{m}$ （55 尺））に梁行 4 間（西より $3.0+3.6\times 2+2.55=12.75\text{m}$ （42.5 尺））で、面積は 210.375 m^2 を測り、遺跡内で最も大きな建物である。確認された 19 基の柱掘り方のうち 9 基に石が入っており、根石の可能性もある。柱掘り方の平面形は円形か楕円形で長軸は 70～90 cm の範囲である。これと類似する建物は、鳥海柵跡の縦街道南区域で確認された東西棟の SB01 四面庇掘立柱建物跡である。これは柱掘り方の深さが庇の方が深く、最初に庇のない身舎があり、後で庇を追加したのではないかとの指摘もある（八重樫 2019）。身舎の柱筋が通る一方、庇の西側が通らず、柱間隔が身舎とずれることなどもその理由である。それはともかく、鳥海柵跡 SB01 の規模は、分析した結果に当てはめると、基本寸法は、桁行 5 間（ $3.45+3.15\times 3+3.45=16.35\text{m}$ （54.5 尺））に梁行 4 間（ $3.15\times 4=12.6\text{m}$ （42 尺））で、面積は 206.01 m^2 を測る。大鳥井山遺跡と比べると桁行が 15 cm（0.5 尺）、梁行 15 cm（0.5 尺）だけ短いだけで、ほぼ同じ規模の建物といえる。『鳥海柵跡 第 18・19 次発掘調査報告書』では、この建物の年代は前九年合戦の前段階のⅢ-1 期（11 世紀前半）としているが（金ヶ崎町教育委員会 2013）、大鳥井山遺跡の青色（仮 SB32）は 4 群であり、前九年合戦後の 11 世紀後葉と想定している。

6. 大鳥井山遺跡の檣状建物・総柱建物・竪穴建物【図 15】

檣状建物跡は大鳥井山にはなく、小吉山の北部地区で 1 棟（緑色 5SB41）、東部地区で 6 棟（紫色 1SB21・紫色 1SB23A・黄色 1SB23B・黄緑色 1SB25・黄緑色 2SB27・青色 1SB22）、南部地区で 1 棟（茶色 4SB40）の合計 7 棟が確認されている。このうち檣門と考えられるのは東部地区の青色 1SB22 と北部地区の緑色 5SB41 である。南部地区の茶色 4SB01 と茶色仮 SB44 は門跡と考えられる。

柱掘り方に石が入っているのは、門跡を除いた全ての檣状建物で確認されており、重量のある建物であるため根石を入れたことが想定される。ほとんどの檣状建物は柵の内側に隣接しているが、単独で建っているものは東部地区中央にある紫色 1SB21 のみ、柵を跨ぐものは南部地区の茶色 4SB40 のみである。茶色 4SB40 は根石がびっしりとあり、礎石建物の可能性もある。

檣状建物は、桁行 2 間（紫色 1SB23A・黄色 1SB23B・黄緑色 1SB25・黄緑色 2SB27・茶色 4SB40）と桁行 3 間（紫色 1SB21・青色 1SB22・緑色 5SB41）に分類される。この中で紫色 1SB21・黄色 1SB23B・青色 1SB22 は南側に 1 間分に付属建物が付いているように思われる。この理由としては、柱掘り方が小さく、柱筋上に延びず歪んだ形になっているからである。上り口に関わる施設の可能性もある。

総柱掘立柱建物跡は、小吉山東部地区のみで 7 棟が確認されている。小吉山南部でも 2 棟の存在を検討したが、全容が明らかでないので今回は分析の対象としない。土器が大量に出土した小吉山北部地区にはないことから、中心建物ではないと考えられる。2 群段階では柱穴が小さいが、4 群段階では大きくなり、柱掘り方に石が伴っているものが多く、建物荷重を考慮した可能性が高いことから倉庫

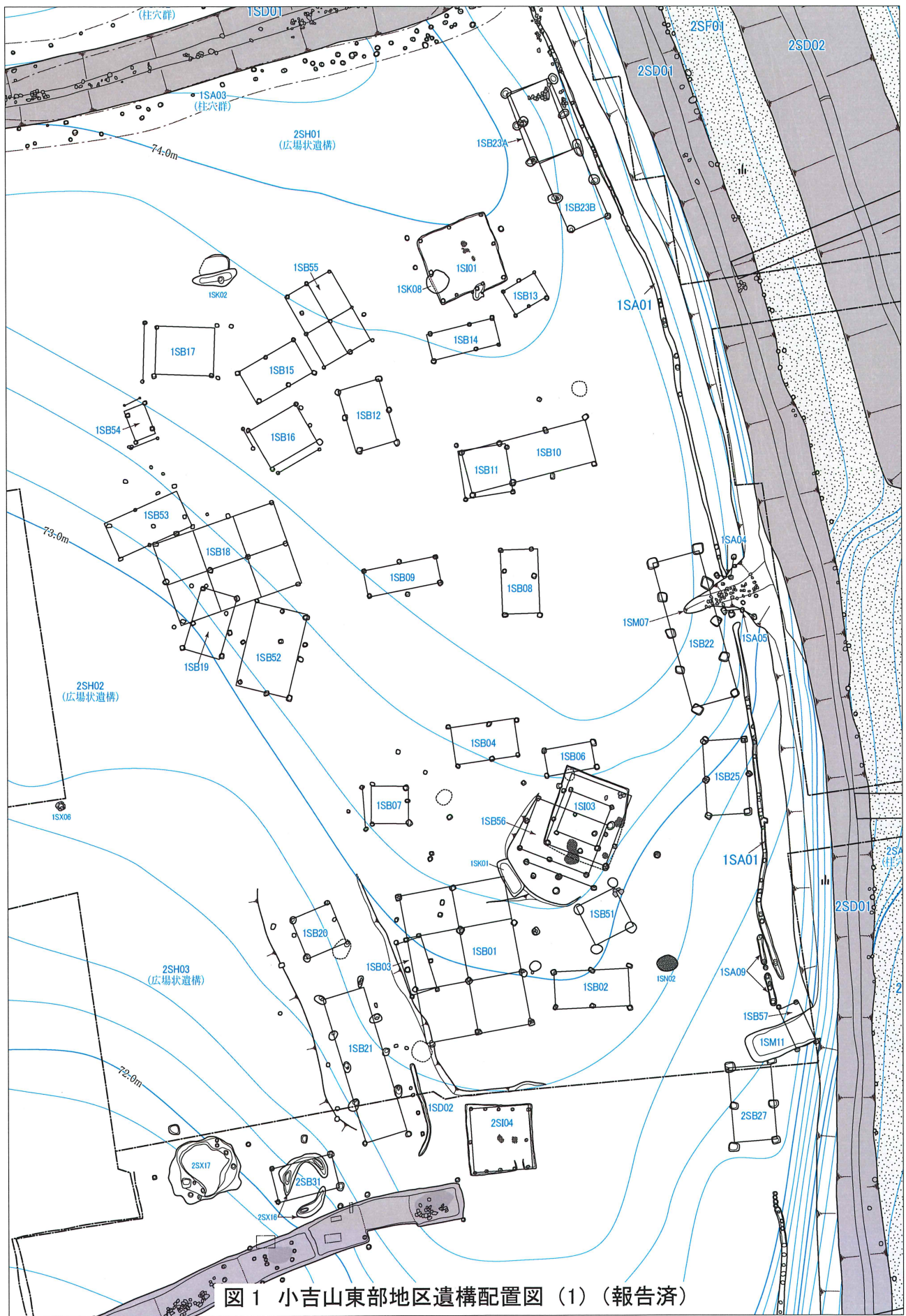


図1 小吉山東部地区遺構配置図(1) (報告済)

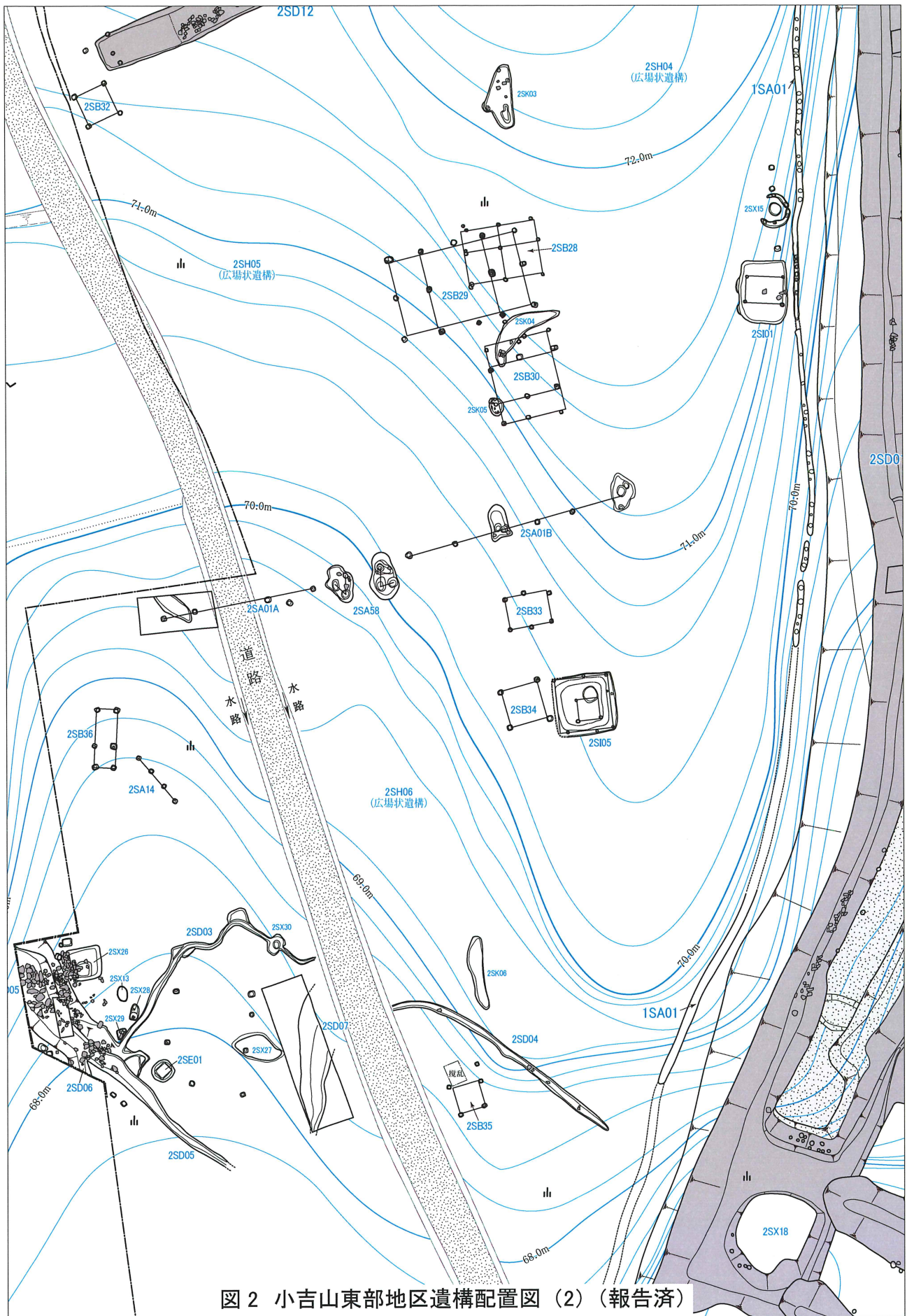


図2 小吉山東部地区遺構配置図(2) (報告済)



图 3 小吉山東部地区建物試案(1・2群)

0 S=1/600 20m

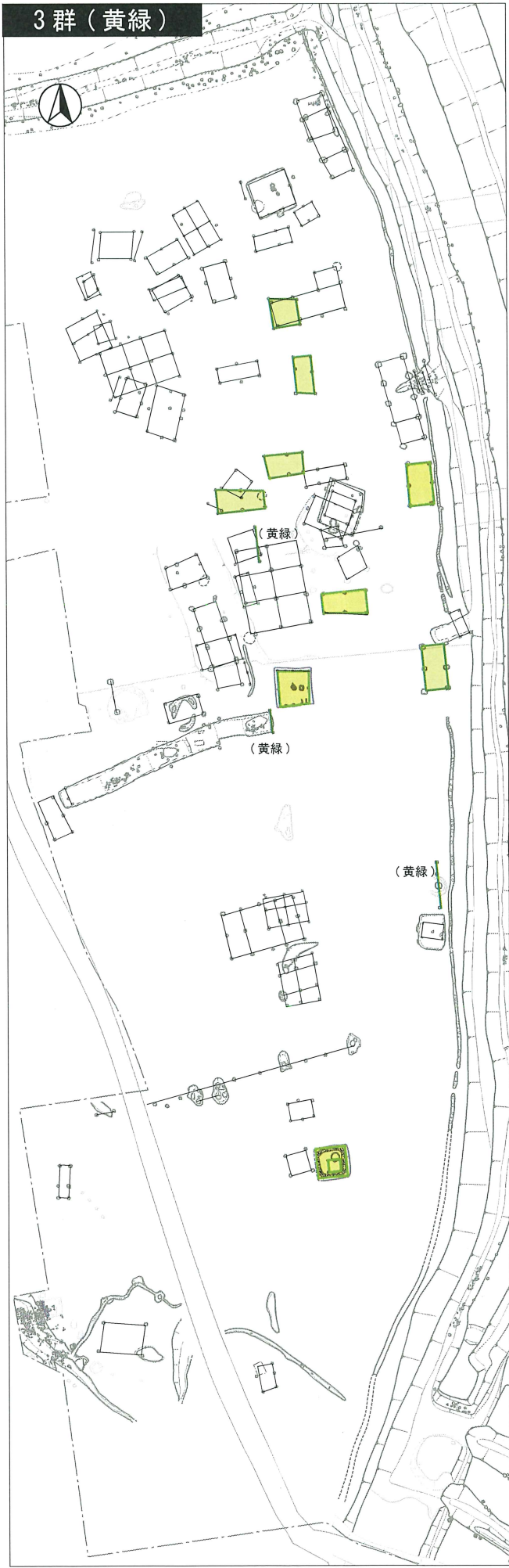
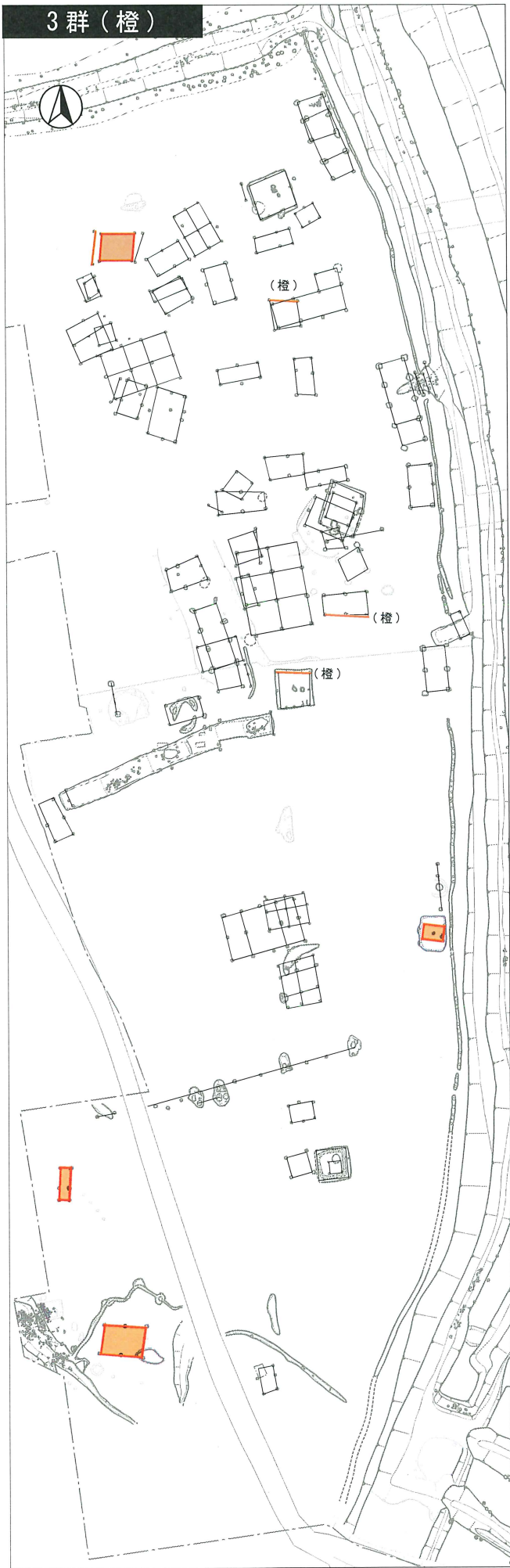


图 4 小吉山東部地区建物試案(3 群)

0 S=1/600 20m

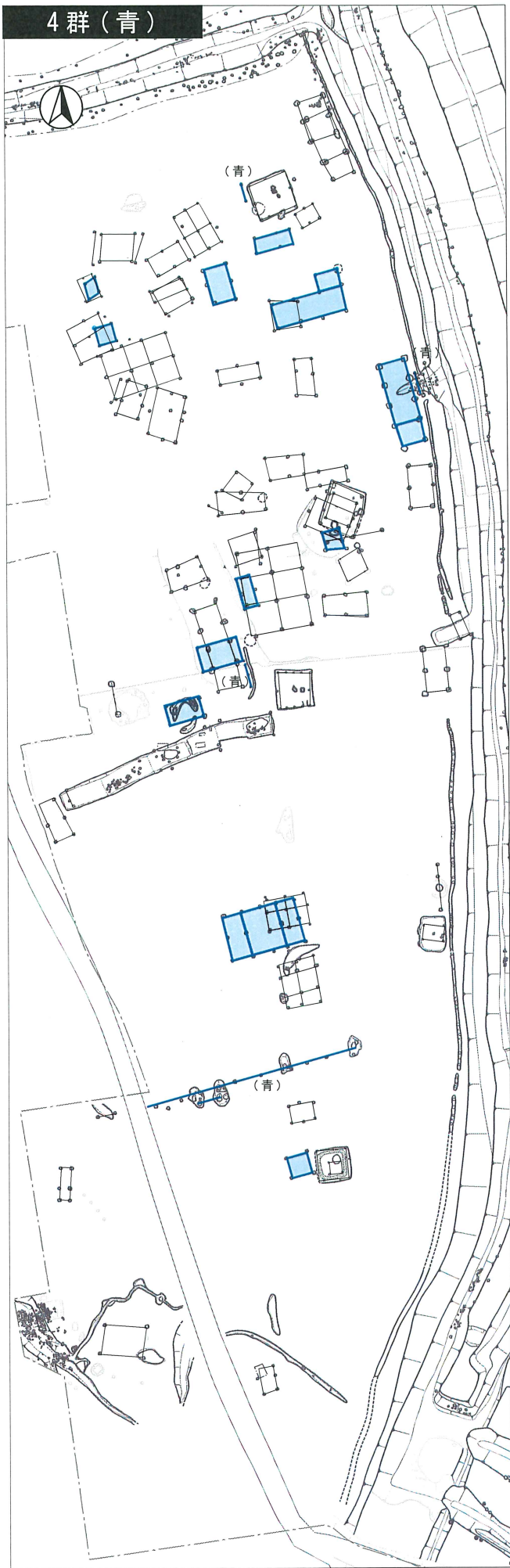


图5 小吉山東部地区建物試案(4群)



図6 小吉山北部地区遺構配置図(1)(報告済)

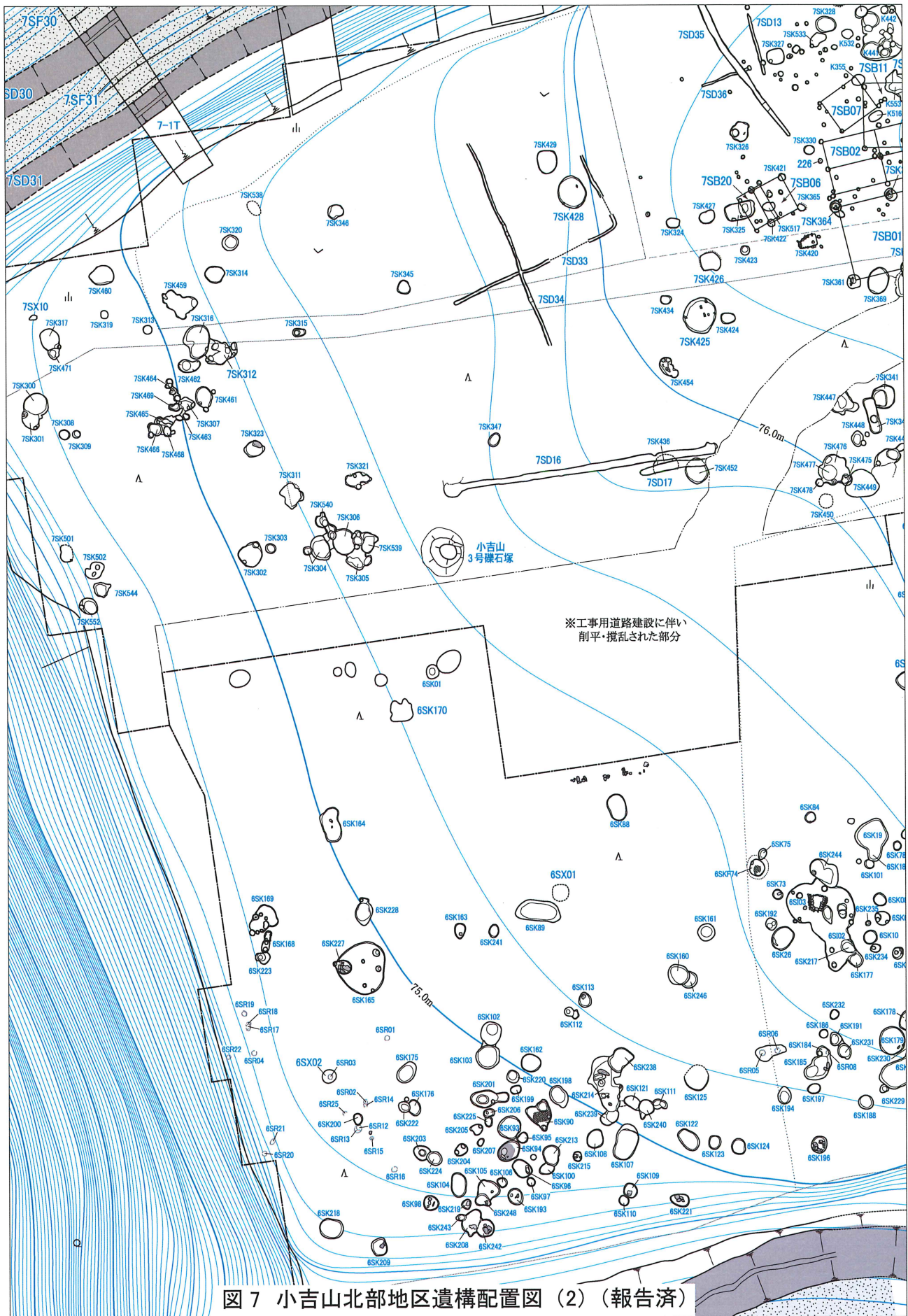


図7 小吉山北部地区遺構配置図(2) (報告済)

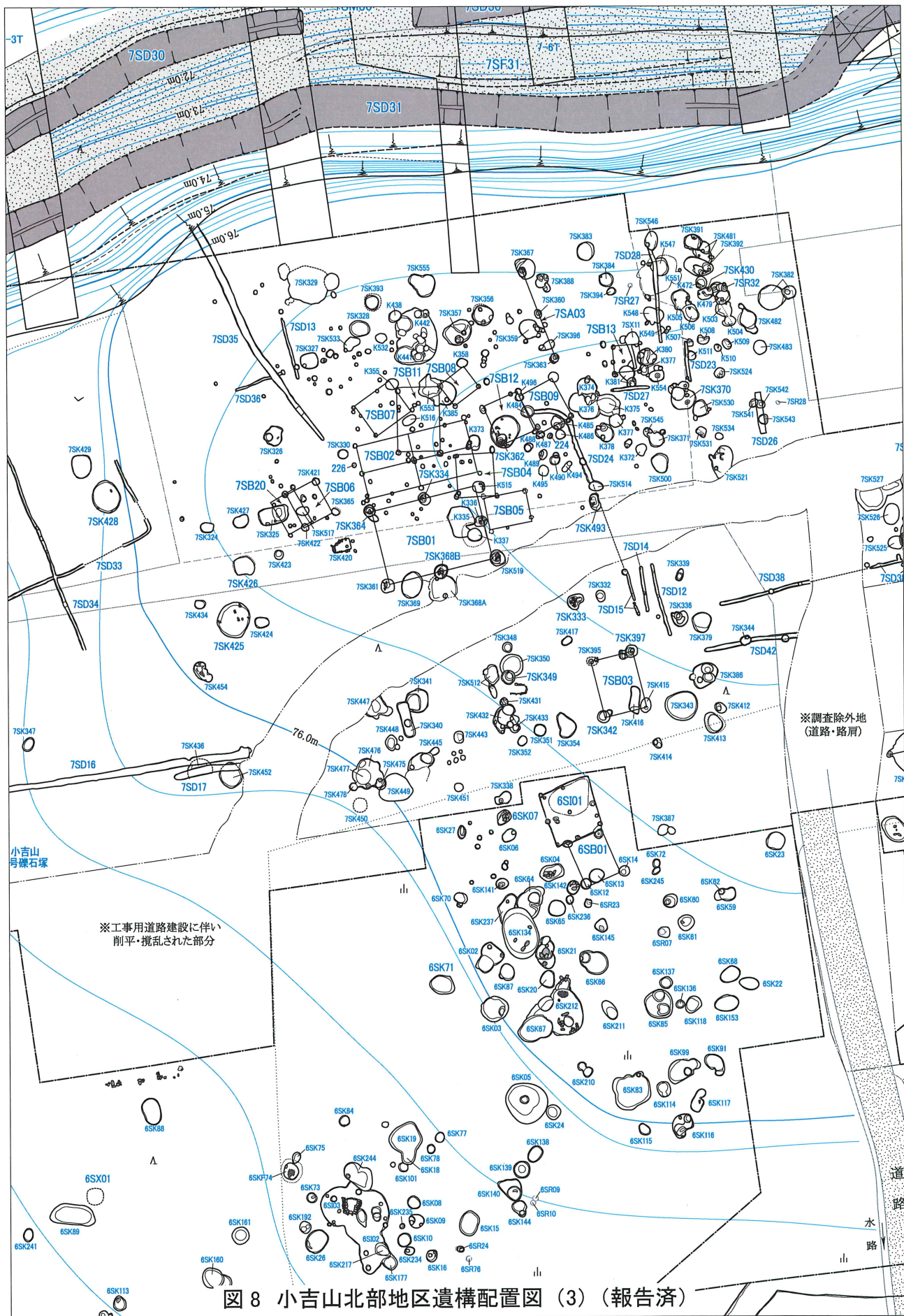


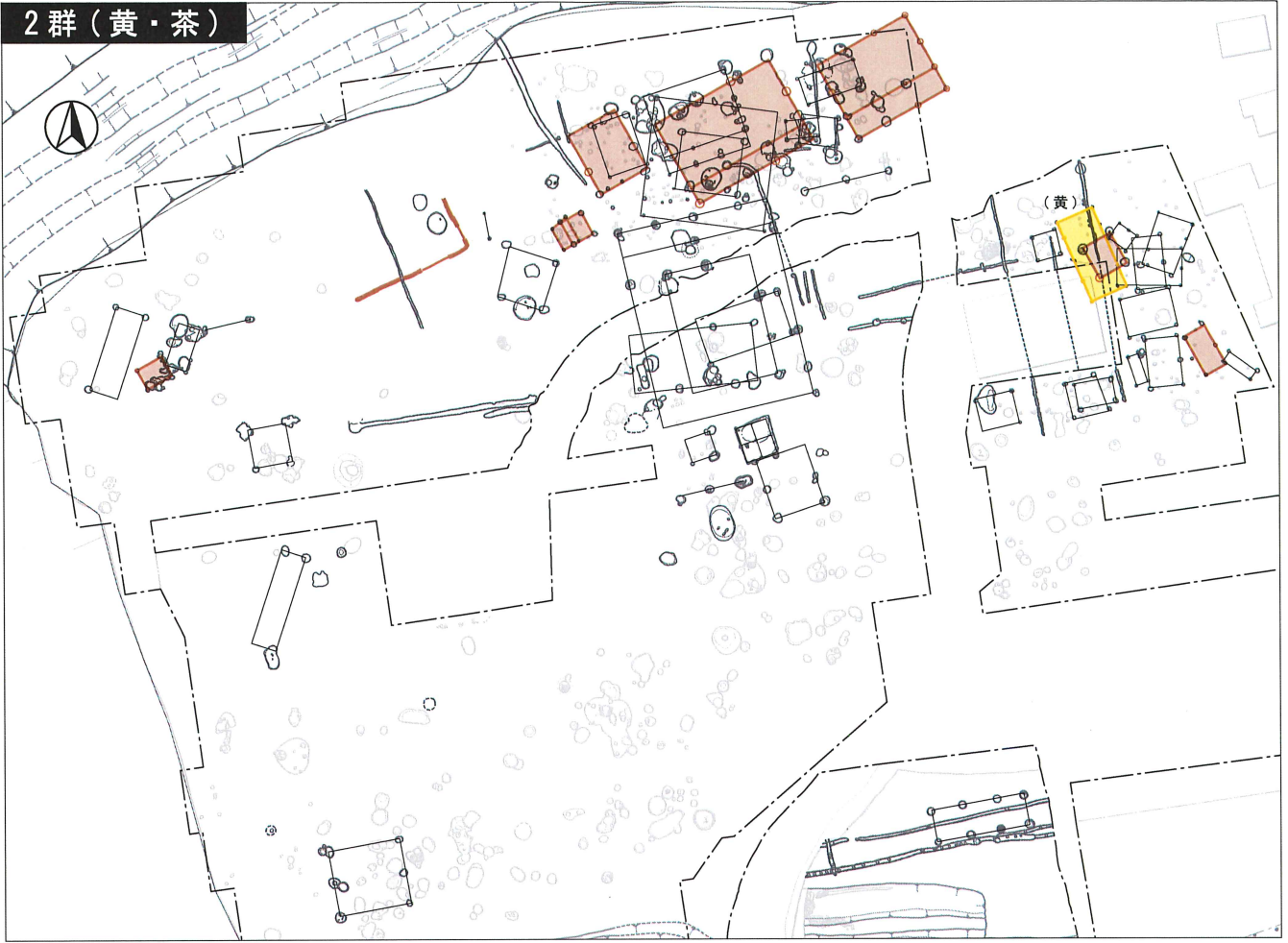
図8 小吉山北部地区遺構配置図(3)(報告済)



图9 小吉山北部地区建物试案(1・2群)

0 S=1/600 20m

2群(黄・茶)



3群(橙)



图 10 小吉山北部地区建物试案(2・3群)

0 S=1/600 20m



図 11 小吉山北部地区建物試案(3・4 群)

0 S=1/600 20m

と思われる。3 群段階では総柱建物が確認されないのは、2 群段階の倉庫が残っていたか、他の建物を利用したかである。

竪穴建物跡は、小吉山の北部地区で 2 棟（紫色 6SI01・橙色 7SI04）、東部地区で 5 棟（赤色 1SI03・紫色 1SI01・橙色 2SI01・黄緑色 2SI04・黄緑色 2SI05）が確認されている。柱穴を見れば、支柱穴だけのもの（橙 2SI01）、支柱穴と壁際柱穴を持つもの（赤色 1SI03・黄緑色 2SI05）、壁際柱穴だけのもの（紫色 1SI01・黄緑色 2SI04）、総柱の柱穴を持つもの（紫色 6SI01）に分類されるが、共通することはカマドが付されていないことである。横手盆地では 10 世紀中葉以降は遺跡も極端に少なくなり、様相が不明であるが、10 世紀前葉までは竪穴建物跡にカマドが付されている。遺跡内では 3 群段階までは竪穴建物が確認でき、4 群では存在しないことになる。その機能については、平面形が類似するものが少ないため、居住空間・倉庫・烽火台（『大鳥井山Ⅱ』）など様々な要素が考えられる。

7. まとめ

- ・ 建物は 9 期の変遷があり、主軸方向から 4 群にまとまる。
- ・ 1 群段階は赤色⇒桃色で、小吉山で現地形と軸線が異なり、最も古い段階である。北部地区では中心建物の確認されていない。遺跡の初源期は、出土土器から 10 世紀後半と考えられる。
- ・ 2 群段階は紫色⇒黄色⇒茶色で、建物は小吉山で中心建物・付属建物・櫓・門・倉庫・竪穴が確認される段階である。地形や区画から凡その館形態が確立された段階で、11 世紀前葉と考えられる。
- ・ 3 群段階は橙色⇒黄緑色で、建物は上記建物の他、大鳥井山西部地区で四面庇建物が、小吉山西部地区で積石塚が造営され、遺跡全体を広範囲に利用する段階である。11 世紀中葉と考えられる。
- ・ 4 群段階は青色⇒緑色で、建物は、中心建物をはじめ、掘立柱建物が大型化し、竪穴建物が確認されなくなる。遺跡の終末であり、防御機能が最も強化された段階で、11 世紀後葉と考えられる。

* 今後、今回検討した建物と、土塁や堀、そして柵などの区画施設との並行関係、共伴する出土遺物の年代等を考慮し、史跡整備に向けてさらに精度を高めていく必要がある。

【引用文献】

・ 金ケ崎町教育委員会 2013『鳥海柵跡第 18・19 次』岩手県金ケ崎町文化財調査第 70 集・窪田大介 2016「安倍・清原氏の仏教」『前九年・後三年合戦と兵の時代』吉川弘文館・島田祐悦 2016「出羽山北三郡と清原氏」『前九年・後三年合戦と兵の時代』吉川弘文館・島田祐悦 2017「金沢城跡」・「沼館城跡」『東北の名城を歩く 北東北編』吉川弘文館・白根靖大 2010『横手市史 通史編 原始・古代・中世』横手市・杉本良 2021「鳥海柵跡原添下区域 SB01.02 掘立柱建物跡仏堂説考」『令和 2 年度国指定史跡鳥海柵跡講演会資料集』金ケ崎教育委員会・高橋学 2021「十足馬場西遺跡-雄勝城・駅家研究会第 2・3 回発掘調査速報」『令和 3 年度後三年合戦金沢柵公開講座資料集』横手市教育委員会・八重樫忠郎 2019『平泉の考古学』高志書院・谷地薫 2021「猫袋遺跡第 2 次調査」『令和 3 年度後三年合戦金沢柵公開講座資料集』横手市教育委員会・横手市教育委員会 1978『大鳥井山Ⅰ』横手市文化財調査報告書第 5 集・横手市教育委員会 1979『大鳥井山Ⅱ』横手市文化財調査報告書第 6 集・横手市教育委員会 1980『大鳥井山Ⅲ』横手市文化財調査報告書第 7 集・横手市教育委員会 1981『大鳥井山Ⅳ』横手市文化財調査報告書第 8 集・横手市教育委員会 1982『大鳥井山Ⅴ』横手市文化財調査報告書第 9 集・横手市教育委員会 2009『大鳥井山遺跡-第 9・10・11 次調査』横手市文化財調査報告書第 9 集

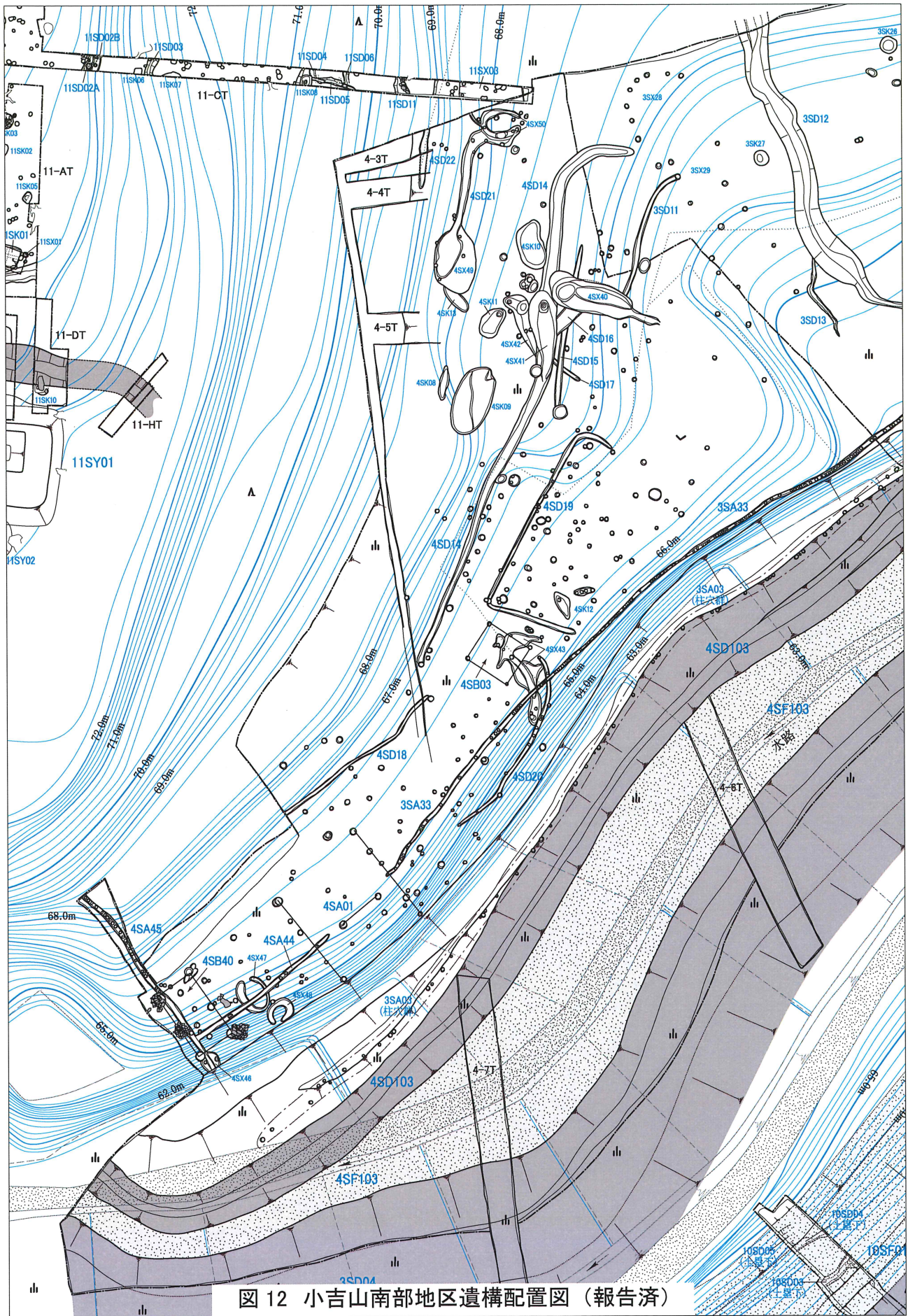


图 12 小吉山南部地区遺構配置図（報告済）

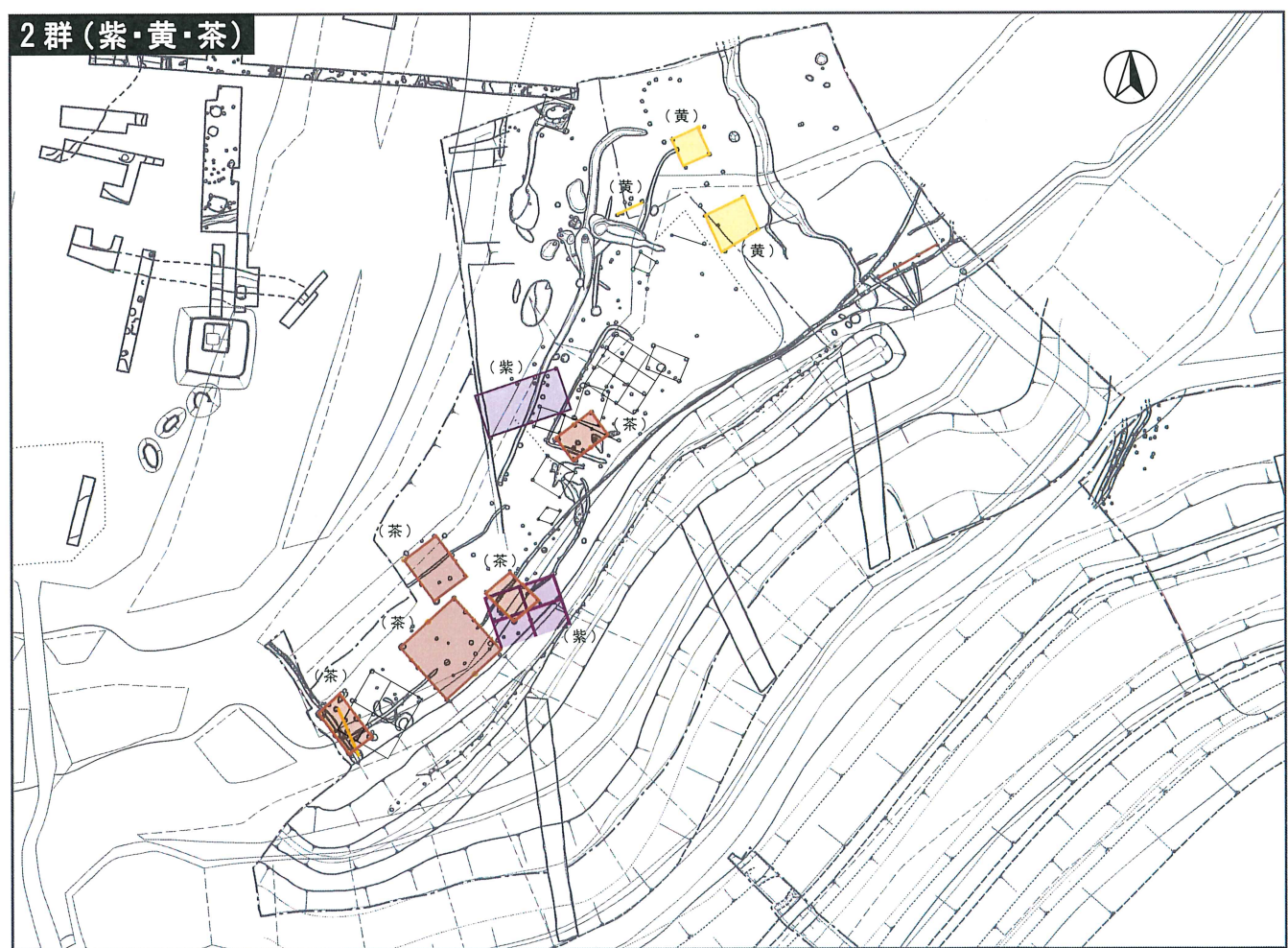
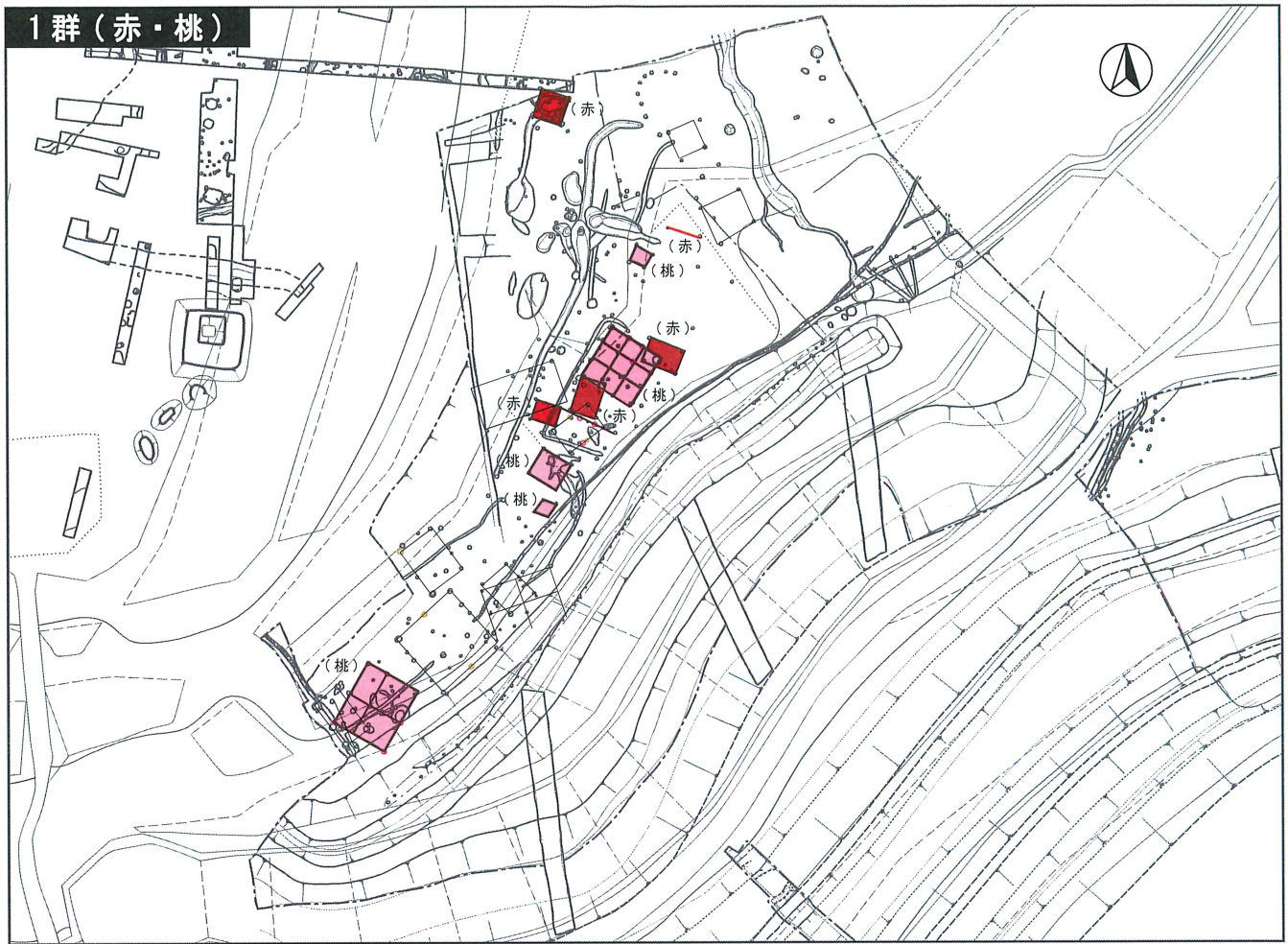


图 13 小吉山南部地区建物試案(1・2 群)

0 S=1/600 20m

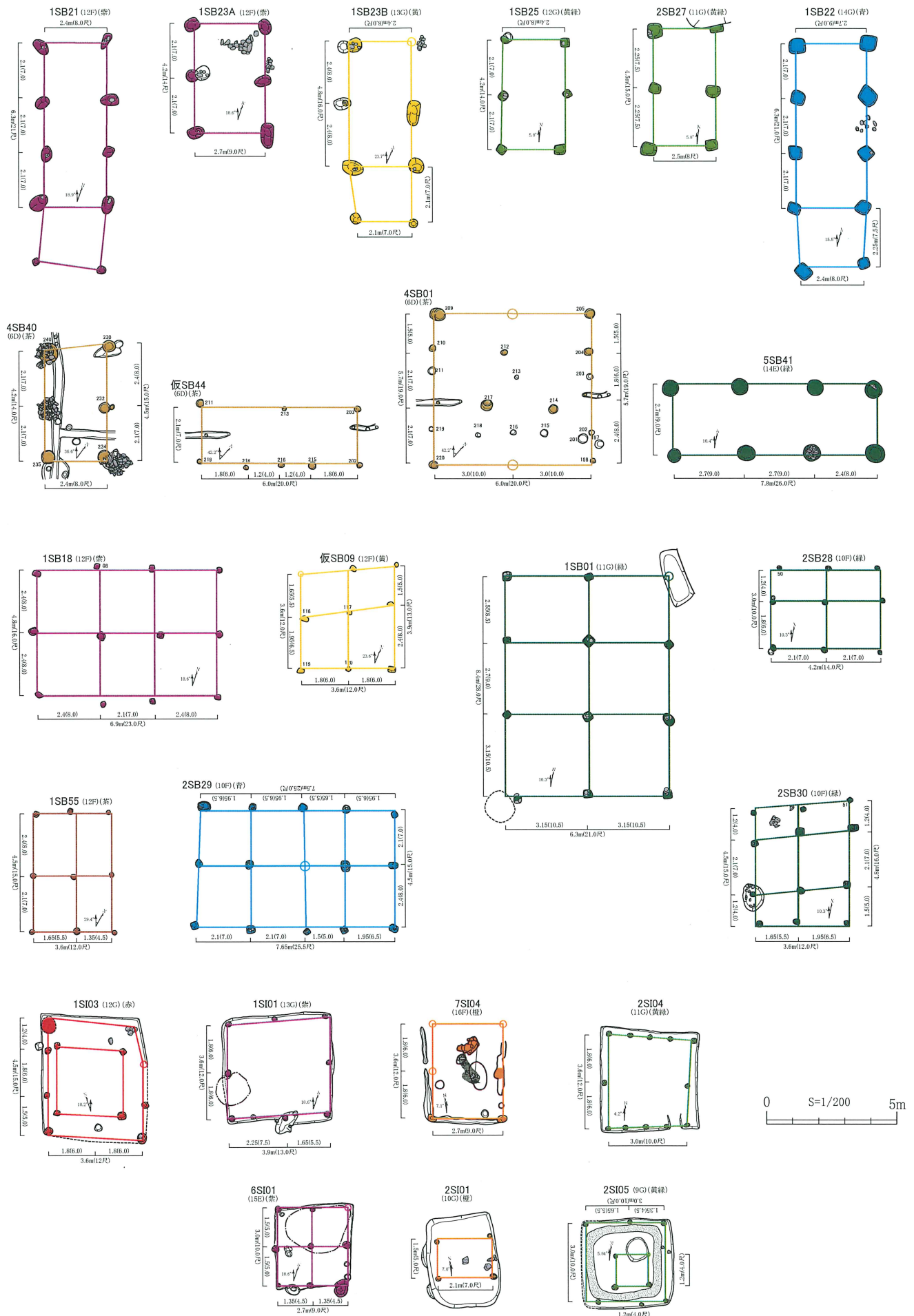


図 15 檜状建物・総柱建物・竪穴建物

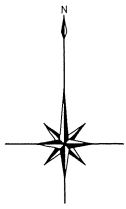


図 16 大鳥井山遺跡の後三年合戦頃の想定図



図 17 大鳥井山遺跡のイメージ図